

白馬～梅海新道～親不知縦走山行報告

かのウエストンが親不知を訪れ、ここが北アルプスの北端であると指摘したと言われます。この地元において、それでは北アルプス完全縦走の道をつけてやろうと決意した人がいます。青海町在住のサワガニ山岳会小野健さんです。もう半世紀近くも前の話です。今や梅海新道として北アルプスを目指す登山者が一度は辿ってみたいと思っているルートです。

今回は、何年かかけて北ア全山縦走を視野に入れられるよう白馬岳から親不知までの長距離縦走を計画しました。直線距離にしても30キロを超える道のりです。このような厳しい山行にどれほどの参加希望者があるものか不安もありましたが、ふたを開ければ北海道支部の7名をはじめあつという間に定員に達してしまいました。梅海山荘の宿泊定員を考慮して定員を定めざるを得ず、一部の方には参加をお断りし誠に申し訳ないこととなりました。

・日程：2012年9月7日～10日（3泊4日） 前泊・後泊あり

・参加人数：13名（男性8名、女性5名）

一鐵 巖、大崎勝子、中谷秀子、神埜和之、銭亀美佐子、常本良一、助田梨枝子（以上北海道支部）、大橋幸子、吉永英明（千葉支部）、井上寛之（東海支部） 高橋 努 CL、菊池英昭 SL、清登緑郎 MG（以上集会委員会）

第1日 9月7日（金）白馬大雪溪～白馬山荘 晴のち曇

・白馬駅 7：30→タクシー→猿倉 8：15→9：22 白馬尻 9：33→10：31 大雪溪途中 10：37→11：25 大休止 11：51→12：35 小休止 12：52→13：39 稜線手前 13：48→14：10 村営頂上小屋→14：45 白馬山荘 全歩程 6時間30分

ほとんどの方が白馬駅近くのホテルに宿泊したので、皆さん元気いっぱい白馬駅前に集合した。タクシーで猿倉へ。8：30には歩き始めた。9月とも思えぬ強い日差しに白馬尻では既に汗びっしょりである。大雪溪は1ピッチほど雪上を歩くがほとんどが秋道である。今年は雪解けが遅かったせいか夏の花々が結構残っていて目を楽しませてくれる。途中には水流が豊富で水場での休憩が嬉しい。6時間ほど急登にあえぎ3時前には白馬山荘に到着。山の中とは思えない立派なビアホールでジョッキの乾杯を楽しんだ。

第2日 9月8日（土）白馬岳～雪倉岳～朝日小屋 晴のち曇一時雨

・白馬山荘 6：04→6：23 白馬山頂 6：38→7：38 雪倉岳手前稜線 7：48→8：40 雪倉避難小屋（朝日まで7km、白馬から4km） 8：51→9：31 雪倉岳山頂 9：46→10：41 水場（涸れている） 10：51→大休止 11：35→12：25 朝日岳分岐（朝日まで2.7km） 12：34→13：35 小休止 13：40→14：10 朝日小屋 全歩程 8時間6分

予報では悪天のはずだったが快晴のもと6時に出発。白馬山頂からは目の前には剣、遠くには槍穂まで北ア一望である。遠来の北海道勢にこの景色が見せられてほっとする。北には雪倉岳から朝日岳のどっしりした姿が遠望できる。さらには拇海新道に連なる峰々もかすんでいる。ここからはまだ日本海は遠い。身が引きしまる思いである。三国境から雪倉避難小屋までは平坦な気持ちの良い縦走路である。花も多く、女性群の花談義が賑やかだ。1ピッチで雪倉岳を登るともう朝日岳も近い。朝日岳の手前で水平道へ入る。これが水平道とは名ばかりで結構なアップダウンである。おまけに途中で雷雨に見舞われる。30分ほどの間だったが雷鳴に肝を冷やした（もっとも今回4日間で雨に降られたのはこの30分だけであった）。朝日小屋はすいており、小屋番の清水ゆかりさんの気配りで大部屋を占拠してすっかりリラックスできた。朝日小屋は要塞のような白馬山荘とちがい規模も適当で、評判通り食事が美味しい。実に居心地の良い山小屋である。人気の理由がよく分かる。



朝日が眩しい（朝日岳山頂にて）

第3日 9月9日（日）朝日岳～黒岩平～サワガニ山～犬ヶ岳～拇海山荘 晴時々曇
・朝日小屋 5：27→6：30 朝日岳山頂 6：40→吹上のコル 7：10<拇海新道>→7：53
長拇山 8：02→8：58 アヤメ平 9：07→9：35 黒岩平（水場） 10：02→10：35 黒岩山→
11：00 大休止 11：21→サワガニ山 12：26→ 13：00 北股ノ水場（水を補給） 13：52→
犬が岳→14：45 拇海山荘 全歩程 9時間 18分

本日も快晴。清水ゆかりさんと従業員一同の盛大な見送りを受けて朝日岳を登る。最盛期ならどれほどの美しさかと思われる花畑を抜けて1ピッチで山頂へ。東には妙高連山や頸城山塊の山々、南には歩いてきた白馬からの峰々、西には富山湾、そして北には遥か拇海新道の山の連なりが続いている。本日の到達点の拇海山荘は台形状の犬ヶ岳の右肩に赤

い屋根を見せている。そのまた遙か先が親不知だ。

少し下ると吹上のコルで名の通り強い風が吹き抜けている。さあ、いよいよここから梅海新道に突入する。赤いペンキで「梅海→日本海」とある。ここで40年前に小野健さんが梅海新道開通のテープカットをされたと聞く。その感激は計り知れないものがあったと思う。梅海新道は数年前から環境省の整備予算がついたお蔭で立派な木道も設置されとても歩きやすくなっている。私は3度目の縦走なのだが歩くたびにどんどん良くなるなんとやら、である。また、この道は途中に湿原が多く、その中の木道を歩いていると本当に鼻歌でも歌いたくような快適さである。

平坦な長梅山、花畑のアヤメ平を経て黒岩平に至る。ここは湿原の中を冷たい流水がほとばしっており、雪解け時にはリュウキンカの群落になる素晴らしいところである。まさに桃源郷である。美味しい水に誘われて思わず朝日小屋の特製おにぎりで早弁となる。この辺りまでが梅海新道の快適さの核心部でここからは厳しさの核心部に入っていく。黒岩山の手前で小滝駅へ降りる唯一のエスケープルートと別れ、後は日本海まで行くしかない。伐開作業を手伝った若い女性の名前がついたという文子の池を通過、サワガニ山を越えると間もなく梅海山荘の水場である北俣の水場に着く。ここで全員から2リッターのボトルを集めて男性有志で水汲み（本当は女性の方が元気なのだが、男の見栄で）。全員2キロの荷重になったところで犬ヶ岳への急登である。喘ぎ、汗がしたたる。犬ヶ岳山頂まで来るとまさに梅海新道のど真ん中の感がある。親不知までにはドーンと白鳥山が阻んでいる。3時前には梅海山荘に到着。さっそく管理人室に潜り込み小野健さんご厚意の備蓄の日本酒をいただき皆さんの健脚を讃えあった。この小屋は小野健さんがボーナスをつぎ込んで建設したもので、当初は小屋掛け程度のものだったのが今は50人も泊まれる立派なものである。ボーナスをつぎ込んで個人が作った山小屋に多くの登山者が宿泊しているなんていうのは他に例を見ないだろう。鮮やかな赤と緑のペンキは、登山で訪れた本職の方が塗っていると。この地にほれ込むのは小野健さんばかりではないようである。夜、富山湾に浮かぶ漁火が手招きするように煌めいていた。

第4日 9月10日（月）梅海山荘～白鳥山～坂田峠～親不知海岸 晴時々曇

・梅海山荘 5:38→黄蓮の水場 7:49→菊石山→8:23 下駒岳 8:33→9:45 白鳥山（避難小屋） 10:23→11:19 シキ割（水場） 11:38→坂田峠 12:35→13:18 尻高山 13:29→14:30 入道山 14:41→小休止 15:41→15:55 親不知 全歩程 10時間17分

いよいよ最終日。本日の行程が最も長い。まずは1ピッチで黄蓮の水場。この時期になると水が細く水汲みに手間がかかる。でも枯れてなくて良かった。アンモナイトを採集したという菊石山を越え、胸を突くような急な直登を越せば下駒山である。小野健さんの主義でこのコースは忠実に稜線をたどっている。つい、ジグザグに道をつけてくれ、とか、こんな山には巻道をつけようよ、なんて勝手なことを言っている。歩くのも大変なのに切

り開くことの大変さは想像を超えている。

長い白鳥山の登りを終えれば大きな登りは終わりだ。白鳥小屋で大休止としてへたり込む。いよいよ海が近くなり、植生も変わってきた。もう一息と思うところだが、実はここからも長いのである。どんどん下り、シキ割の水場を過ぎ、最後に急な金時坂（山姥に育てられた坂田金時にちなんだ名称）を転げるように下るといきなり舗装道路に出る。ここが坂田峠である。昔はここに金山があり芸子さんが人力車で通ったとある。舗装道路に立つと俄かに里心が出てしまうが、車はない。梅海新道の本番はここから始まるといっても過言ではない。700メートル弱を海まで下るのが結構登りもある。今日の下界は32度、どんどん暑くなる。最後は一同へろへろ状態で親不知観光ホテル前に降り立った。

直前に怪我をして不参加となった集会委員の高橋聡さんが下山口まで出迎えてくれた。固い握手を交わす。ホテルの前には、なんと小野健さんが冷たいビールと良く冷えた大きなスイカ、冷たい水大福等々を準備して出迎えてくれているのではないかと。最後の下りで冷たいビールに冷えたスイカと謔言のように唱えていたら現実になった。駐車場のアスファルトに座り込みビールとスイカで生き返る思いがした。皆で急な階段を下り日本海の水に手を浸し梅海新道完全縦走の幕を閉じた。

小野健さんは夜の懇親にもお付き合いいただき、なんでこんなバカなことをやったのか、を面白く聞かせていただいた。4日間にわたる大変厳しい縦走登山であったが、小野健さんとの邂逅も含め実に充実した山行となった。



今日も晴天だ。最終日の朝（梅海山荘前にて）

私は小野健さんとは20年余のお付き合いになる。一貫してお世話になりっぱなしである。今回もまたお世話になってしまった。にもかかわらず、糸魚川駅に送っていただき別れ際に「いくらでも甘えてくださいね」とのお言葉をいただいた。こんな方なのである。だから梅海新道も拓けたのだろう。

リーダー 集会委員 高橋 努 記



小野健さん（前列中央）を囲んで梅海新道完全縦走を祝う（梅海新道下山口・親不知観光ホテル前にて）